



「リチャード二世」地誌考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 豊 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3370

「リチャード二世」地誌考

竹 内 豊

Shakespeare's Place-Names Commentary *King Richard the Second*

Yutaka Takeuchi

Abstract

This commentary is designed to treat the names of places in Shakespeare's plays. Although the names of places are formally recorded in nearly every edition, as words, they are summarily dismissed — usually in a line. The names of places stand in the background of the natural environment, and they are closely related with history of man.

This commentary is attempted in the belief that knowledge of names of places is an important step in understanding human works in many fields—especially in literature.

1 London 1. 1. ト書 SHE—1¹⁾

2 Gaunt 1. 1. ト書 附図2-1 B

これは次項3のLancasterと同じくリチャード二世の叔父ジョン John (1340. 6. 24—1399. 2. 3) についての地名である。昔はどこの国でも個人名にその住む土地の名が付けられることが広く行われ、例えば次郎長というのは「清水港」の次郎長のことであり、国定忠次は「国定村」の長岡忠次郎のことであり、また渥美清の演ずる寅は「葛飾柴又」の寅というように地名がつき、特に領主・貴族にあってはその封土の名で呼ばれた。わが国では加賀候とか薩摩候とか、何々の守等は皆その例である。ただこれらの慣

例は初めの趣旨とは違い、後には爵位に付けられた地名はその貴族の支配地を示すものではなくなった。

ジョンは権力を恣にしたエドワード三世 (1312. 11. 13-1377. 6. 21. r. 1327-77) の第四子²⁾である。彼は、リチャード二世の父、つまりエドワード三世の第一子にして黒太子 Black Prince の有名な綽名で呼ばれたエドワード (1330. 6. 15-1376. 6. 8) とは兄弟であった。ジョンはベルギーのこの地ゴントで生れたのでこの地名を個人名に冠してジョン・オブ・ゴント John of Gaunt と呼ばれた。英語では Gaunt [ɡɔːnt] または Ghent [gent] といわれるが、一般に通用しているのは原地ベルギーのフラマン語 Vlaams のヘント Gent またはフランス語でのガン Gant である。エスコ川 Escaut (ベルギーではスヘルデ川 Scheldt という) とリス Lys (ベルギーではレエイエ Leie) の両川の合流点にあって運河等によって出来た多くの中島に跨って発達したベルギー第二の貿易港市で人口約 151,000 人である。繊維工業を中心とした機械工業と輸出を主とした花卉栽培が盛んである。1816 年創立のヘント大学はこの地方の精神的中心であり、民族意識の昂揚は特に 1916 年この大学で漸くフランス色を脱するに至り、1923 年にはフランス語と並んでフラマン語で教授されるという歴史的事件となり、更に 1930 年にはフラマン語をこの大学における唯一の用語とする法律を成立させた程であった。運河に臨む中世自由都市の面影は今日までよく保存され、ヨーロッパでも最も美しい都市の一つである。1911 年第 11 回ノーベル賞受賞の詩人メーテルリンク Maurice Maeterlinck (1862. 8. 29-1949. 5. 6) の生地である。

尚この英名 Gaunt は普通名詞では「痩せた」の意であって、本劇第 2 幕第 1 場 72-83 行にかけてリチャード王とジョン・オブ・ゴントの会話にはこの語を固有名詞と普通名詞に使い分けてのやり取りがある。

この項については SHE-2.

封土をいうからランカスターという市のことでなく、州のこと。州は Lancaster とも Lancashire ともいわれる。そして Lancs と略称される。イングランド北西部にある州でイングランドで最も人口稠密な地域である。西岸海洋性の湿潤な気候、ペニン山脈の西斜面に広がる肥沃なランカシャー平野はイングランドの農業、特に牧畜生産の中心となっている。またロンドンに次ぐこの国第二の貿易港リヴァプール Liverpool 等を有する良好な水運の便、ペニン山脈西側の豊富な石炭等が産業革命以後ここを一大工業地帯とし、特にインドとの綿業貿易はこの地方を英国でも最も繁栄させたところとしたが、第二次世界大戦の直前からランカシャーがその生命線であるインド市場を完全に失ってからはその繁栄は急速に衰微した。「ランカシャーの今日は英国の明日」「Lancashire thinks to-day, what all England will think to-morrow」という諺があるように、かつて英国の繁栄を担ったその栄光はこの州の中心都市であるマンチェスター市の市役所^{タウン・ホール}の建物に今日も窺うことが出来る。英国の地方都市の中で、また首都ロンドンにおいてもマンチェスター・タウン・ホールに比較する建造物は無いといってもよい。この町の大学のジョン・ライランズ John Rylands 図書館にしても然りで、これまた英国屈指の図書館である。大聖堂と見まがうようなその内部の荘厳さにおいては大英博物館の図書館 British Library など比較にならない。ここにも「マンチェスターが今日考えることをロンドンが明日考える」「What Manchester thinks today, London will think to-morrow」という諺の存する所以である。

この州は1267年ヘンリー三世の第二子エドモンド Edmund Crouchback (1245-96)がランカスター伯に封ぜられて王家の中でも特に強力な王家となったが、更にその孫ヘンリー(1300-1361)が1351年に Duke of Lancaster となってここが王領となるに及んでその権力は更に強化された。この力が最大に強化確立されたのは本劇の中心人物ジョン・オブ・ゴントによってであった。ジョンは1項に述べたようにエドワード三世の第四子であったが、1359年上記のランカスター公ヘンリーの娘ブランチ Blanche と結婚してその公家を相続し 1362 年 Duke of Lancaster となったことによってである。そう

して 1396 年その権利は英国王領 Duchy of Lancaster という名称となって拡大強化され永久に確立された。このようなわけで彼の権力この上もなく、そのため人民の反発を買い、ロンドンのサボイ Savoy (附図 3-2 C) にあった彼の豪館は 1381 年 6 月タイラー Wat Tyler³⁾ が率いた農民一揆の連中に同月 13 日 (木曜日) 襲われ焼き打ちを受けた⁴⁾。

尚ジョンは英詩の父といわれるチョーサー Geoffrey Chaucer (ca. 1340-1400. 10. 25) のパトロンであった。

4 Hereford 1. 1. 3 SHE-1

5 Norfolk 1. 1. 6 SHE-1

6 Alps 1. 1. 64

言う迄もなくヨーロッパの主要山脈で、東はオーストラリア東部から起り、西はフランス東南部まで幅は最大 150 km、長さ 1,000 m 以上にわたって東西方向に走り、全体としては地中海側に凹面を向けた三日月型を描いている。占める面積は約 33 万 km² で、フランス、イタリア、スイス、ドイツ、オーストリア及びユーゴスラヴィアを占めている。脈中には 4,810 m、ヨーロッパ最高峰のモンブラン Mont Blanc があり、平均高度は 2,500 m である。

Alps の語源に関しては昔から異説が多く、ローマ人がアルプスの山が年中山頂に白雪を載いているところから「白い」を意味する彼等のラテン語で *albus* と呼んだに始まるといい、また一説にはゲール語の *alp* やウェイルズ語の *ailp* がいずれも「高い山」を意味し、また非アーリア系語の *alb* がこれも「高い」とか「山」の意味であるところから発しているともいう。またスイスがアルプス高地の「棚状の牧場」を *alb* と呼んでいるところから Alps はこの *alb* の転訛したもので「山頂附近の牧場」の意味であるとする説もある。

シェイクスピアは全作品中 Alps の語をこの他に『ジョン王』(1. i. 202),

『ヘンリー五世』(Ⅲ. V. 52) 及び『アントニイとクレオパトラ』(Ⅰ. IV. 66) で使っただけである。

7 Gloucester 1. 1. 100 附図 1-5 D

グロスターと読む。これもグロスター市のことでなくここでは州のこと。Gloucester とも Gloucestershire とも呼ぶ。Glos. と略称する。イングランド南西部の州で、A. E. ハウスマンが *A Shropshire Lad* の X X I 「ブリードン山」 'Bredon Hill' の第 1 聯及び第 2 聯で歌っている 'both the shires' と 'the coloured counties' はこのグロスターシャーと隣りのウスターシャーを指している。尚このブリードン山のすぐ南にあるトゥクスベリ Tewkesbury はシェイクスピアの生地を流れるエイヴォン川がセヴァーン川と合流する地点である。

州都のグロスターは英国最長にしてまた最大の流量を持つセヴァーン川 Severn (288 km) 河口に位置する。運河が古くから発達したところで特に州都のグロスターからセヴァーン川河口のバークレー Berkeley (26 項参看) に至る全長 26 km のグロスター・バークレー運河 Gloucester and Berkeley Ship Canal は Bristol 海峡を内陸奥深くにまで導いてこの市を重要な貿易港としている。グロスター市はブリタニア(今日の英国)がローマの属州であった頃にグレヴウム Glevum と呼ばれ、武勲輝しい第二アウグスタ軍団⁵⁾の駐屯地であった。

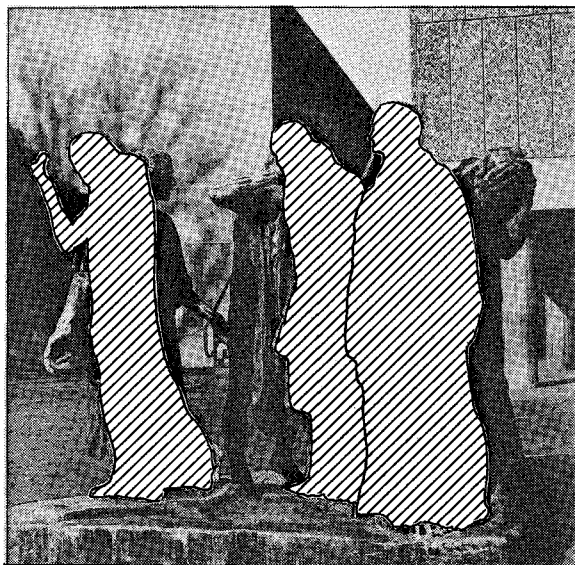
8 Calais 1. 1. 126 附図 2-1 B

フランス北東部、フランドル平野の海岸線上にあつてヨーロッパ大陸とイングランド島とがドーヴァー海峡 Strait of Dover を挟んで最も接近している地点で、その間約 40 km、英国に渡る「飛脚港」packet-station で、この町とドーヴァー港との間には連絡船が通じ所要時間は普通の船で 90 分、水中翼

船 Seaspeed Hovercraft では僅か 30 分である。そうしてこゝからヨーロッパ各国の各市に直結する国際列車が発着する。

この町は世界のレース産業の中心地である。

フランスと百年戦争の事を構えたエドワード三世が 1346 年この町を包囲し、11ヶ月の包囲作戦の後に翌年陥落させ、以来 1558 年まで英国の領有するところとなった。この 11ヶ月を越える包囲作戦に遭って飢餓に苦しむカレー市民を救おうと自ら身を挺した 6 人の市民がいた。初めカレー市民を皆殺しにする以外の降伏の条件⁶⁾を受けつけなかったエドワード王は廷臣の進言を容れて、カレー市の重立った人間 6 人の生命と引換えに町を救うことを承諾した。この条件に自ら進み出たのは最も富裕な長老ウスタッシュ・ド・サン・ピエール Eustache de Saint-Pierre であった。続いてジャン・デール Jean d'Aire、そしてジャック・ド・ヴィエッサン Jacques de Wiessant とその弟のピエール・ド・ヴィエッサン Pierre de Wiessant、それにジャン・ド・フィエンス Jean de Fiennes とアンドレ・グルドル Andrieu d'Andres の 6 人であった。彼等はいずれも町の財産家であり、有力な地位にある人であった。彼等は自分の生命と引換えに町を救うために、指令通り下着のまま素足で、首には綱を巻き、市門の鍵を持って英王エドワードに赴いたのであった。この英雄を記念するためにカレー市は 1884 年記念像の製作をフランスの彫刻家ロダン François Auguste René Rodin (1840. 11. 12-1917. 11. 17) に依頼した。1884 年から 1888 年にかけてブロンズ『カレーの市民』Les Bourgeois de Calais (英語では The Burghers of Calais という)を作ったが、それはカレー市当局が考える勇壮な英雄の姿ではなかったためロダンとの間に可成りの紆余曲折があったが、ロダンは主張を通し、注文を受けてから 11 年後の 1895 年この町の市庁舎の正面広場に建立された。1915 年ロンドンにこの「群像」のコピーが建てられた。こちらの方は、人質となって市から出てきた 6 人の犠牲者を殺さず、その命を救ったエドワード三世の寛容な慈悲心⁷⁾を記念するためであった。ロダン自身 1911 年この建立の場所を選定にロンドンに行っており、建立されている場所はロンドン市内でも美しい一帯で、



《カレーの群像》

斜線の三人が前面で右から

ジャン・デール

ウスタッシュ・ド・サン・ピエール

ピエール・ド・ヴィエッサン

その後に三人がいて、左から

ジャン・ド・フィエンス

ジャック・ド・ヴィエッサン

アンドレ・ダルドル

特に夕景が見事なテムズ川畔ヴィクトリア・タワー公園 Victoria Tower Gardens (附図3-3B)で、「群像」は国会議事堂を背にしている。

尚、上野の国立西洋美術館にもこれと同じもの⁸⁾が所蔵されている。

9 Coventry

1. 1. 199

附図1-4E

シェイクスピアの生地ストラットフォード・アポン・エイヴォン Stratford-upon-Avon の町を流れるエイヴォン川を少し遡ったところに明状し難い程美しいロマンティックな城のあるウォリック Warwick という静かな町があり、ここから更に真北に上ったところに今日全く廃址となり乍らも妖しい雰囲気を漂わせる煉瓦色の巨大な城壁の残るケニルワース Kenilworth の町を西北に抜けて程遠くないところに位置する。バーミンガム Birmingham の東南東約 29 km, ロンドンからは北西に鉄道で約 150 km, 大英博物館に近いユーストン駅 London Euston St. を出ると急行列車はノンストップで 64 分から 68 分でこの町に着く。人口 334,839 (1971 年) でウォリック州の州都である。機械・時計・自動車・自転車・航空機など近代産業の都市である。英国製自動車のトップを切った「デームラ」Daimler が出来たのはこの町で 1896 年であった。このように工業都市であったため 1940 年 11 月 14 日夜から 15 日の朝にかけてドイツ空軍の徹底的な空襲を受けた。この夜イギリスの電波に攪乱されないラヂオ・ビームを持ったドイツ空軍の第 100 戦闘隊 500 機は 600 トンの高性能爆弾と 10,000 個の焼夷弾を雨と降らせてこの町を潰滅させてしまった。死者は 400 名に達したといわれる。このことから「軍需品の生産を低下させるため空襲で破壊する」の意のドイツ語に coventrieren という新語が作られ、それが英語化されて coventrate とか coventrize という語が辞書に加えられた。このような猛烈な空爆によって廃墟となった町の復興は戦後著しく、破壊の跡もわからない程であるが、奇跡的に残ったセント・マイケル大聖堂 St Michael's Cathedral の塔と外壁の一部がこの空爆を歴史に示す記念として残されている。このように事件の跡を何時の世まで忘れず

に伝えるという猛烈な執拗精神はヨーロッパ人の持つ恐しい伝統性である。この記念の残骸の隣りには聖堂とは全く考えられないような何か公会堂がホテルといった感じの前衛的な新しい聖堂が建てられている。これは先ず 1956 年にエリザベス女王によって定礎式が行われ、1962 年 5 月 25 日に献堂式が行われたのである。この聖堂の建設にはドイツからの献金もあったと聞いている。

この町を最も有名にしているのは「ゴダイヴァの伝説」である。ゴダイヴァ Godiva (Godgifu とも記す, fl. 1040–1080) とはマーシア伯レオフリック Leofric, Earl of Mercia (?–1057, 8. 31) の夫人の名である。レオフリック伯はラテン名では Leuricus といい、当時エドワード証信王に娘エディス Edith (Edgitha) を嫁がせるなど権力を得るには手段・節制もないウェセックスのゴドウィン伯 Earl Godwin (1053 没) 及びマクベスに殺されたダンカン王の長子マルカムが難を避けてイングランドに逃げて来ていたのを助けてスコットランドに進軍してマクベスを打破って彼をマルカム三世として擁立させ、シェイクスピアの『マクベス』にも登場しているノーサンブリアのシウォード伯 Siward, Earl of Northumberland (1055 没) と共にイングランドを三分するような実力者で、1040 年から 1042 年まで英国王であったデンマークのカヌート二世 Cnut II (Harthacnut または Hardicanute と綽名された) と次の王エドワード証信王に大きな影響力を持っていた人であった。このレオフリックが夫人と共に 1043 年に創建したベネディクト派の修道院 (convent) がこの地名の由来とされている⁹⁾。

さて夫人のゴダイヴァであるが、この名はウィリアム征服王が命じて作らせたドゥームズデイ・ブックの中に既に屢々記されており、そうしてコヴェントリの町を愛した夫人は夫が支配するこの町の民が重税に悩んでいることを知って住民の税の軽減を夫に頼んだ。伯は仲々承諾しなかったが夫人が余りにも執拗であったので、もしお前が真昼間町の端から端まで住民の見て中を真裸で馬に乗って通るならばその願いを聴いてやると冗談半分に言った。それを真に受けた健気な夫人は脛以外の全身が隠れるように髪をふり捌

いで馬に乗って町を通った。これには流石のレオフリックも驚き住民の税を軽くしたというのである。これだけの話では夫人の行為は只善がりの悲壯的なものか、または哀れなものである。しかしそこにはちゃんと救いがあった。日頃夫人を敬愛していた住民は夫人が自分たちの為に裸で道中するということを知って、その姿を見るはとても忍びないから、その時間には街を歩かず、戸を閉めて屋内にいるよう互いに触れを出した。ところが只一人不埒な料簡の男、仕立屋のトムがこれは面白いことと戸の隙間から覗き見をしたところ天罰覲面、彼は忽ちのうちに目が潰れ、「覗き見のトム」Peeping Tom の汚名を後世に残した。それ故にこの町をピーピング・トムの町という人もいる。ただこの「覗き見のトム」の話は 1678 年以前にはないので後世つけ加えられた話らしい。ゴダイヴァの話はセント・アルバンズの修道士にして、またすぐれた年代記作者でもあった ウェンドーヴァのロチャー Roger of Wendover (?-1236) が天地創造から 1235 年までを書いた年代記『歴史の精華』*Flores Historiarum* に最初に見出される。その後いくつかの年代記にもゴダイヴァ夫人の話は載っているがそれらはすべてこのロチャーのものの亜流である。有名なものでは 17 世紀の廷臣・歴史家のダグデール Sir William Dugdale (1605-1686) の『ウォリックシャーの故事来歴』*Antiquities of Warwickshire* (1656) にあり、これは更にウォリック出身の怒り屋のランドー Walter Savage Landor (1775-1864) がイタリアのフィレンツェで書いた五巻本の『架空の話』*Imaginary Conversation* (1824-29) の中に書いている。また桂冠詩人テニスンが 1842 年に「ゴダイヴァ」*Godiva, A Tale of Coventry* の詩を発表している。その他にも詩人・劇作家のドレイトン Michael Drayton (1563-1631)、ジャーナリスト・詩人・批評家・随筆家として一時世を風靡したリー・ハント James Henry Leigh Hunt (1784-1859) も詩に書いている。ゴダイヴァ夫人の騎馬像は市の中心街ブロードゲイト Broadgate にあるショッピング・センターの広場にある。これは 1949 年リード・ディック Reid Dick という人の手になったものである。

1398 年 9 月本劇でも述べられているノーフォーク公トマス・モーブレー

とヘレフォード公ヘンリー・ボーリングブルック（後のヘンリー四世）がリチャード二世の前で行うとした斬り合いの場はこのコヴェントリの東ゴスフォード・グリーン Gosford Green であった。またこの町はヘンリー四世とヘンリー六世の時代に議会が開かれているが、前者のはリチャード二世から王位を奪ったヘンリー四世が1404年この町で法律学者を一切出席させないで開いたために「低能議会」とか「無学議会」*Parliamentum Indoctorum* と綽名された議会であり、後者はバラ戦争の最中の1458年多数の人の権利剥奪があった為 *Parliamentum Diabolicum* と綽名されたものであった。

10 Woodstock

1. II. 1

附図1-5 E

ここでいわれる Woodstock's blood というのはグロスター公 Duke of Gloucester のことで、公は元 Thomas of Woodstock といい、エドワード三世の第六子で1377年 Earl of Buckingham となり、1385年 Duke of Gloucester となった。1397年リチャード二世によって12項に述べるブレイシー Plashy で捕えられ、フランスのカレーに連れて行かれてそこで殺された。9月8日以降24日の間といわれる。公が Thomas of Woodstock といわれたのは1355年1月7日にオックスフォードシャーのこの地ウッドストックに生れたためである。ウッドストックはロンドンの北西約120kmの地点、オックスフォードの北西約12kmにあり、今はオックスフォードのベッドタウンとなっていて、バスで約30分のところである。人口は約2,000（1971）である。

ヘンリー一世はこゝにマナー・ハウス manor house（館）を建て猟場としての御料林を設けた。正に地名が表す通りである¹⁰⁾。

1173年ヘンリー二世は王妃エレナー Eleanor of Aquitaine (ca. 1123-1204. 4. 1) を幽閉して、1175年ロザモンド・クリフォード、通称「美しいロザモンド」Fair Rosamond を寵妃としたが、伝説では王はエレナーの嫉妬を恐れてロザモンドをこの御料林の奥深くに迷宮 labyrinth（またはmazeともいう）を造って隠したが、王妃エレナーの嫉妬の執念は誠に凄じく、

幽閉の身にも拘らず手を廻してロザモンドを探し当てて 1176 年彼女を毒殺したという。ロザモンドの墓石には次のラテン語の碑銘が刻まれていたと伝えられている。

Hic jacet in tumba Rosa mundi, non rosa munda :

Non redolet, sad olet, quae redolere solet.

(ここの墓に眠っているのは世界のバラであるが、それは清浄のバラではない。生前香わしい人ではあったが、今は芳香ならぬ悪臭を放っている)

エドワード一世の第二子 Edmund of Woodstock (1301—1330, 後の Earl of Kent) がこゝで生れ、またエドワード三世の長子黒太子 Black Prince, Edward of Woodstock もこゝで 1330 年 6 月 15 日に生れ、また上記の通りその第六子もここで生れているのである。

1554 年 5 月 23 日から 1555 年 4 月末までエリザベス一世は姉のメアリ女王によってこゝに監禁されていた。

今一つこのウッドストックで触れなければならないのはブレナム宮殿 Blenheim Palace である。宮殿と記したが王室のものではないので「館」あるいは「御殿」に当るが余りに立派なので日本語では王宮・宮殿の言葉が当てはまるようである。1701 年フランスのルイ十四世はスペインの王位継承をめぐるオランダ・イギリスと衝突した。これが 1713 年まで続いたスペイン継承戦争 (イスパニア継承戦役) である。当時の英国王オレンジ公ウィリアム三世は先きに 1689 年のイギリス「名誉革命」で英国王となったオランダのオラニエ公ウィレム (20 項参看) であって、かねてからルイ十四世のオランダ侵略等の野心を挫くことを畢生の業としていた程であったからウィリアム王は対仏大同盟を形成し、その盟主としてルイ十四世に対抗した。決戦は 1704 年 8 月 13 日ドイツ南東部バイエルン Bayern のドナウ川に臨むブリントハイム Blindheim (附図 2—2 D) で行われた。ここはアウグスブルグ Augsburg の北北西約 37 km の今は人口 1,000 人にも満たない小村である。バイエルン地方というのは今日西ドイツの南東部の州でミュンヘン München がその州都で、英語ではバイエルンがバヴァリア Bavaria となり、ブリントハイムは

ブレニム Blenheim となる。さてその決戦はルイ十四世のフランス・バイエルン連合軍をイギリスの常勝の誉れ高い名将¹¹⁾マールバラ公ジョン・チャーチル John Churchill, Duke of Marlborough (1650-1722) が打破って、世界征服をしようとするルイ十四世の高慢な幻を永久に消滅させ、彼の晩年に暗い影を投じさせたのであった。時に英国王はアン女王の時代となっていた。女王はこの大戦勝に対する彼への褒賞として、マナー・ハウスのあるこの地ウッドストックの御料林を下賜し、ここに二階建ての大館を建てて公に与えた。総工費 30 万ポンドでその中の 25 万ポンドが議会から支出された。残りの 5 万ポンドはマールバラ家の支出であった。造営工事は 1705 年に始められ、完成は公の死後の 1727 年であった。18 世紀イギリスにおける最大の規模で、その規模の大きさの一例を示すと大ホールは幅 14 m、長さ 21 m、高さ 20 m で厨房から 100 m も離れているといった程である。規模の大きいことは只建物ばかりでなくその庭園においても桁違いのものであり、またこの宮殿の敷地に今日 100 名程の公爵家の仕事に携わっている人が住んでいるということを知る時に、玄関の一步外はもう道路だ、という貧しい住いのわれわれの比較の規準では全く通用しないものである。設計者は 1714 年授爵されたヴァンブルー (ヴァンブラ) Sir John Vanbrugh (Vanburgh, 1664-1726, 3. 26) であった。ヴァンブルーの生涯は曲折に富み、1683 年から 2 年間フランスで建築を学び、1686 年には軍隊に入って 1690 年から 1692 年まで捕虜となり、その捕囚生活の後半はバスティーユ Bastille に投獄されていた。1696 年劇作家に転じ、1705 年までに 10 篇の戯曲を発表して当時シェイクスピア劇などに匹敵するという評判の劇を書いていたCongreve William Congreve (1670. 4. 5-1729. 1. 19) と並ぶ風俗喜劇作家となっていた。1698 年から建築の実務につき、1705 年ロンドンにヘイマーケット劇場 Haymarket Theatre を建て、同年から 1707 年までこの支配人となっている。この劇場は堂々としていたがその音響効果は貧弱であったといわれる。

さてこのブレニム宮は当時の英国では珍しいバロック風建築様式で建てられたが、ヴァンブルーが得意とした割にそのバロック趣味は余り洗練されて

いるとは思われない。

第二次大戦で比類なき統率力を持って英国を勝利に導いたウィンストン・チャーチル Sir Winston Leonard Spencer Churchill はこの公爵家の分家に当るが、彼の父ランドルフ Randolph (1849. 2. 13-1895. 1. 24) が第七代マールバラ公の三男であったところからウィンストンは 1874 年 11 月 30 日この宮殿に生れ、またハイド・パーク・ゲートの自宅で 1965 年 1 月 24 日亡くなった彼の墓も先祖のと並んでこの宮殿のすぐ傍の教会墓地にある。チャーチル家は本家・分家共に今やかつての栄光・権力なくその生活窮状といわれている。

11 York

I. II. 62

SHE—1

12 Plashy

I. II. 66

附圖 1—5 G

表記はこの他に Pleshy, Pleshey, Plessey があるが公に使われているのは Pleshey である。語源的にはフランス語から出たもので 榎木等で囲った地の意である。町の位置は、かつてイースト・アングリアといった今日のエセックスの州都チェルムズフォード Chelmsford から鉄道で北に 16 km, ロンドンからは約 64 km の地点にグレイト・ダンモウ Great Dunmow という町があるがこの町とチェルムズフォードを直線で結んだ丁度中間点である。

劇のこの場でグロスター公夫人、つまりグロスター公ウッドストックのトマスの未亡人は亡夫の兄であるゴーストのジョンに夫の復讐を頼んでいる。亡夫は 10 項に記した通り 1397 年リチャード王によってこの地で捕えられ殺されたのであった。

尚第2幕第2場の90行でグロスター公未亡人はこのプレイシーで死んだと報ぜられるが、実際は1399年10月3日バーキングBarkingのベネディクト派の教会堂Barking Abbeyで亡くなっているのである。バーキングはロンドン塔に近いフェンチャーチ・ストリート駅Fenchurch Street Stの約13

km 東にあるエセックス州に属し、テムズ川の一支流ローディング Roding の流れるロンドンの特別地区 municipal borough であったが 1963 年来大ロンドン州 County of Greater London に入れられている。

13 Derby

I. III. 35

附図 1 - 4 E

こゝでもダービーシャー Derbyshire のこと。州都でもダービーという。イングランド中部にあって農牧業と化学・機械・繊維工業、それに陶器産業が盛んである。ロールズロイス Rolls Royce の航空機エンジンやその自動車はこのダービーの町で作られる。州都ダービーはかつて英国がローマの属州であった時代にデルヴェンティオ Derwentio と呼ばれた古い町でロンドンから北西へ鉄道で 205 km。人口約 21.9 万 (1971) である。尚有名なダービー競馬とは無関係である。序いでながら競馬は 1780 年これを創設したのが第十二代ダービー伯であったためダービー競馬の名があるが、行われる場所はロンドンの home counties の一つサレー州のエプソム Epsom という町である。

14 Caucasus

I. III. 295

英語ではコーカサス Caucasus だが原地名はカフカース Kavkaz である。東はカスピ海、西が黒海、北はクーママヌイチ凹地、南はトルコ及びイランの国境に囲まれた地域。この地方を占めるコーカサス山脈には万年雪をいただき、氷河を抱く 5,000 m 以上の高山が聳えている。

シェイクスピアはこの語を全作品で二度使用しているが、そのいずれもが矢張り山を指していて、地方を言っていない。すなわち本劇ではボーリングブルクが「雪の山」といい、『タイタス・アンドロニカス』の第 2 幕第 1 場 17 行でも述べているのはコーカサスの岩頭のことである。この地名の文学作品における記録は実に古く、ギリシアの悲劇詩人アイスキュロス Aischylos (前 525-456) の『縛られたプロメーテウス』*Prometheus desmotes* の中に既に現

れている。このアイスキュロスの劇の中で、プロメーテウスが人間に火を与えたためにこの巍峨として聳える岩山に縛られているのであるが、シェイクスピアが上記『タイタス』の場で使っているのも同じくプロメーテウスの話である。

15 Ely House

I. IV. 58

附図3-2 A及び附図4

地名ではないがこの館の所在地について記しておく。イーリーの司教がロンドンに持っていた館で、中世紀のロンドンでは最も印象的な館で黒太子はここに住み、また本劇での通りジョン・オブ・ゴントはこの館で病床にあって (I. IV), ここで1399年2月3日亡くなった。

18世紀までは旧ロンドン市のはずれ、今日のセント・ポール大寺院の北西約0.8kmのホーバン・サーカス Holborn Circus のすぐ北にあった。今日こに残っているのは当時の礼拝堂で、これは今日もローマ・カトリック教会として使われている。今日この辺りはかつてのイーリー館の庭に面したハットン・ガーデン通り Hatton Gardenの名で通っている。

Ely House の名称は18世紀になってイーリーの司教がその館をウェストミンスター議会の近くに移転することを決め、現在ロンドンの中心街ピカディリィ・サーカスからピカディリィ通りを西に少し行ったドーヴァー・ストリート Dover Street の37番地に館を新築してからである。1909年までイーリーの司教のものであったが、その後いろいろな人が変わり住み、1965年からはオックスフォード大学出版局 Oxford University Press が借用している。

本劇の Ely House はホーバンにあった旧のものを指していることは言う迄もない。

16 Northumberland

II. I. 147

SHE-1

17 Wiltshire

II. I. 215

附図 1-5 D・E

イングランド南部地方で海に面しない州の一つで、またトマス・ハーディの小説や詩の多くに扱われるところで一般にハーディ・カントリと称されるもののうちの一つである。アルフレッド大王に象徴される古代英国の雄ともいわれるウェセックス王国は今日のウィルトシャー、ドーセット、ハンプシャー、バークシャーの諸州を含んでいたものである。

この州の五分の三はソールズベリー平原 Salisbury Plain と称する石灰質の草原とマールバラ草丘 Marlborough Downs である。この州で最も有名なものはソールズベリー平原にあるストーンヘンジ Stonehenge である。巨大な石柱群で最高の高さのものは 6 m を越えるものである。英国の地形はなだらかな草原・丘陵が続き、目を遮るような高い山がないためか島国根性の英国人はこのような程度のものに感心しているらしいが、エジプトのスフィンクスなどを見た眼には少しも驚くことのない貧弱なものである。この巨石を何故このように集め、積み重ねたかは現今も不明である。太陽崇拝説、墳墓説など紛紛としている。この地方の州都ソールズベリーにある大聖堂とオールド・セアラムについて SHE-1。

18 Port le Blanc

II. I. 277

附図 2-2 A

シェイクスピアの版本の中では Port le Blan, le Port Blan, le Port Blanc となっているものもある。フランスのブルターニュ地方のコートウデュノール県 Côtes-du-Nord le にある現代名 Port le Blanc という非常に小さな港町である。

19 Brittany

II. I. 278

附図 2-2 A

フランス西部の地方名で大西洋に北西に突出する半島地方で前項 18 の

コートゥデュノール県などはこの地方に属する。古くはアルモリカ Armorica, 更に古くは Aremorica と呼ばれた。これは「海に臨む地」の意味のケルト語のアルモール Armar から発したものであった。地質上対岸のイギリスの南西部と連絡が保たれているのと同じようにこの地方はイギリスにいたケルト族がゲルマン民族のブリテン島襲来の難を逃れてブリテン島からこの地に逃げてきて住みついた為ローマ人はこの地方を小ブリタンニア Britannia Minor と呼んだことに Brittany の名の由来がある。Brittany の語はフランス語ブリターニュ Bretagne に対する英語である。それ故にか Bretagne とはブリトン人の国の意といわれる。このような理由でこの地方の言葉は特にブリタニー語 Breton といわれる。

尚シェイクスピアの版本によっては Brittain, Bretagne などとなっている。

20 Exeter

II. I. 281

附図 1-6 C

イギリス南西部、デヴォンシャーの州都。ロンドンのウォータールー駅から 3 時間 40 分はかゝる可成りの遠地にある。人口約 9.5 万 (1971) で、1942 年ドイツ空軍の爆弾で破壊された為に都市計画が進み新旧の建物の並ぶ落着いた町。今述べたようにロンドンから可成りの遠地である為この地方一帯の開発は最近漸く進んで来た段階であるが、このエクセターの町だけはその歴史は非常に古く、重要な町として発達して来た。すなわちイギリスがローマの属州であった時代のうち西暦 50 年頃ローマ人がこゝに城塞を築いて町を開き、イスカ・ドゥモニオールム *Isca Dummoniorum* と名づけここを起点とするローマ道路を設けた。この城壁の大部分は 1942 年のドイツ空爆で破壊されたがその一部が現存しているイギリス最古の町の一つである。そうして英国王室、特にエドワード証信王、ウィリアム征服王、チャールズ一世、オレンヂ公ウィリアム三世などがこの町と密接な関係を持っている。例えばオレンヂ公は 1688 年 11 月 5 日、300 隻近い大船隊を率いてオランダを出発し、デ

ヴォン州のトー・ベイ Tor Bay という湾に到着し、翌6日湾の南のブリックスハム Brixham に上陸し、エクセターに無血入城し、市の主教邸に司令部を設け多くの貴族・ジェントルマンの支持を受けてロンドンに向けて進軍し、1689年4月11日英国王位に就いたのであった。オレンジ公の遠征軍の陣容は歩兵が18大隊—1大隊の兵力は約600人、騎兵3,280名、馬4,000頭、その秣300トン、煙草4トン、ビール1,600樽、ブランデー50樽、オレンジ公専用四輪馬車、予備の長靴1万足、それに移動可能な橋梁と鍛冶工場、貨幣鑄造用の鑄型と印刷機も備えていた。

この町にある12世紀のノルマン様式の端整な美しい大聖堂は特に有名である。高さがそう高くないので辺りの建物が邪魔で見晴しが悪かったがドイツの空爆で東側にあった中世城壁の一部が壊されるなどして見晴しが今ではよくなっている。その端緒は670年より早くここに修道院が建てられていたといわれる。聖ボニファース Saint Boniface¹²⁾はこの修道院で研修したと伝えられる。932年に教会堂が建てられたがこれは1003年デーン人によって破壊され、1019年時の英国王も兼ねていたデーン人のカヌート王によって再建された。エドワード証信王は無防衛なクレディトン Crediton から司教座をエクセターに移す許可を時の司教レオフリック Leofric¹³⁾に与えた。そうして1050年エドワード証信王はレオフリックをこの初代司教に任じ、聖堂が建てられた。レオフリックは1072年に亡くなったが彼がこに残した所謂「エクセター本」*Codex Exoniensis* (*The Exeter Book*) はまことに貴重な文献である。これは誰かが950年から1000年の間(975年頃と推定される)に書き写したものをレオフリックが1060年頃この聖堂の教会堂に残したものが今日保存されている。内容はOE(古代英語)の哀歌としての代表作品である『さすらいの人』*The Wanderer*や『海行くもの』*The Seafarer*等である。

21 Canterbury

II. I. 282

SHE-1

22 Bretagne

II. I. 285

19項に同じ

23 Ravenspurgh II. I. 296

附図 1-3 G

Ravenspur とも綴る。ハンバー川河口の Spurn Head に近いところで本劇の通り国外追放になっていたボーリングブルックが 1399 年 7 月に上陸した。また追放されていたエドワード一世も 1471 年にこゝに上陸し帰国した。今日この Ravenspurgh はその形跡もない。ハンバー川の三角江で砂州となっているからである。

24 Windsor II. II. ト書

附図 1-5 F

ロンドンの西方約 32 km, 汽車で 50 分のテムズ川の右岸にある。人口約 1.6 万 (1971) で英国王室の居城ウィンザー城があるので有名。エドワード証信王がこゝに館を持ったが、次のウィリアム征服王はテムズ川を見下ろすチョークの台地に築城を決意した。王が 1070 年こゝを訪れていることは既に知られており、また 1086 年この城はドゥムズディ・ブックに記録されている。城はその後ヘンリー三世、エドワード三世、ジョージ四世によって増改築されて今日の形となった。中でもエドワード三世はこの城で 1312 年 11 月 13 日生れたことは彼にこの城に対する強い愛着となり、王は全イングランドから腕利きの職人を集めて 1350 年頃から改築を始めた。

尚城の対岸徒歩僅かの地に有名なイートン校があるがそれについては SHE-1。

25 Worcester II. I. 58

附図 1-4 D

ここでは Worcestershire のことをいう。イングランド中部の州で「『ヘンリー八世』地誌考(前篇)」161 頁で記したようにケント州と共に 'the Garden of England' といわれる地味豊かな地方であって、混合農業、酪農、園芸農業特にホップ栽培が盛んでイングランド最大のホップ市場がある。農産加工と

して日本でも馴染のウスター・ソースの生産で名を成している。

州都ウスターは英国の大内乱の時に王党に最後まで忠誠を守り通した町であったが遂に 1651 年若いチャールズ二世はこの町でクロムウェルに惨敗を喫した。1651 年 9 月 3 日クロムウェルによってこの町に包囲されたチャールズ二世はウスター大聖堂の窓から臣下の兵がクロムウェル軍によって潰走させられたのを見ることによってこの内乱の終末は決定づけられたのであった。

この町を流れるセヴァーン川の左岸に沿ってあるウスター大聖堂は古くは聖オズワルド St. Oswald¹⁴⁾によって修道院として建てられていたものが 1080 年代になってウルフスタン Wulfstan¹⁵⁾によって建てかえられ、1084 年建造の地下納骨堂が今日残っているこの聖堂の建物のうちの最古の部分である。この納骨堂にノーサンブリアの王で聖人となったオズワルド¹⁶⁾の形見が祀られている。またこの聖堂には左手に剣を持って奇怪な容貌をした欠地王ジョンの大理石像がある。これはドーセット州のパーベック Purbeck で産する Purbeck marble あるいは Purbeck stone といわれる褐色の上質の石で出来ていて、このジョン王の像が英国王室のものとしては最古の像である。この像は多分ジョン王の没した 1216 年に遅れること 2 年の後に製作されたとされる。

26 Berkeley

II. II. 119

附図 1-5 D

ブリストル湾に注ぐセヴァーン川河口に近いこの町は中世には Berkley といった。その昔アングロ・サクソン時代は Berclea, Beorclea と記した。ロンドンから鉄道で約 250 km の地点で人口僅か 600 人程の眠れるような静かな小さい町である。この小さい町にあるパークリー城はウィリアム征服王の治世に築かれたもので、こゝに最初のプリンス・オブ・ウェイルズであったエドワード二世は 1327 年 9 月 22 日に惨殺され、今日その部屋は殺害の行われたまゝの状態で保存されている。

種痘法の発見者ジェンナー Edward Jenner (1749. 5. 17—1823. 1. 26) の生地でもある。

27 Bristol II. II. 135

附図 1—5 D

ここは大西洋から大きく湾入したブリストル湾に臨み、グロスター州の州都ではないがこの州切つての大都会、人口約 42.5 万 (1971)。都市としての歴史は古く 18 世紀にはロンドンに次ぐ英国第二の都市— 商易・学芸文化の中心であったが 19 世紀以降は諸般の事情が相重って繁栄は抑えられたが、近年再び化学・食品・重化学工業が興り、港も国際貿易港として重要な地位を占めて来ている。

ブリストル城はアルフレッド大王の長子エドワード Edward (Eadward, Eadweard とともに記録される。綽名は the Elder。? 870—924) によって建てられたと伝えられる。ウィリアム征服王の長子ロバート Robert (1051—1134) を支持する叛軍の拠点となったところでもある。ウィリアム征服王の孫にしてヘンリー一世 (征服王の第三子) の甥のスティーヴン Stephen (ca. 1097—1154. 10. 25) はヘンリー一世が亡くなると王位継承者を自任して即位し、1135 年から 1154 年の約 20 年間王位にあったが、ヘンリー一世の娘マティルダ Mathilda を支持する派との抗争がその間続き、どちらも決定的な勝利は得られなかった。或る年代記作者がこれ程苦しめられた犠牲者の出た験しはない、と伝える程人民は虐殺され、苦しめられ、略奪された。スティーヴン自身も 1141 年捕えられて、このブリストル城に送られ、6 ヶ月間も鎖で結がれるという一時もあった。また前項に記したエドワード二世がバークレイ城で暗殺されたが、バークレイ城に移される前はこのブリストル城に幽閉されていた。クロムウェルによって引き起こされた内乱時代王党派が根城としたのはこの城であった。1656 年クロムウェルによってこの城は放棄され廃城となった。今日市内のセント・ピーター St. Peter 教会の北側、カースル・ストリート Castle St. とコック・レーン Cock Lane 及びボトル・レーン Bottle

Lane に囲まれたところがその位置である。

尚 Bristol の綴りは ME (中世英語) では Bristow であった。シェイクスピアの版本によっても Bristow, Brist, Bristoll となっている。

28 Catwold II. III. 9 附図 1-5 D・E

これはグロスター州の東部を西南から東北にかけて連なる山地でコッウォールド山地 Cotswolds または Cotswold Hills, Coteswold Hills といわれる。また別称コッテスウォールズ Cotteswolds ともいう。全長約 86 km, 幅 48 km, 高さ約 309 m で西側は急峻であるが東側は勾配が緩やかで立木少なく草地である為牧羊に適し、コッウォールドといわれる毛の深い羊の飼育で有名であり、特にシェイクスピア時代にはこゝは英国における羊毛の生産と羊毛加工産業の中心地であった。今一つこの地方を有名にしているのは Cotswold limestone という石で建てられた町並みの美しさである。この石は白葡萄酒のような、蜂蜜のような色の石灰岩で今日も尚生産されている。

Cotswold の名の起源については前半の cots- は不確かではあるが「羊」の意であるとされ、後半の wold は「森林地帯」を意味する。

テムズ川はこの地帯からその源を発する。

29 Salisbury II. IV. ト書 SHE-1

30 Carlisle III. II. ト書 附図 1-2 D

イングランド最北州カンバーランド州の州都で人口約 7.1 万 (1971)。ロンドンから北西へ鉄道で 480 km。ロンドンのユーストン駅を出ると特急で約 4 時間弱で着く。こゝから東海岸のニュー・カッスル・アポン・ティンに鉄道で 97 km (1 時間 45 分。この線は普通列車のみ)、北東のエディンバラに鉄道で 158 km (1 時間 45 分)、北にグラスゴーには鉄道で 161 km (1 時間半) な

ど6本の鉄道がこゝで交わる鉄道交通の要地である。当然道路にあっても非常に重要な地点であり、イングランドはここで終りといった感じのところでスコットランドに近い為ローマ領有時代に軍事上の拠点となりルグヴァルム *Luguvall(i)um* といわれた。東海岸のベリックの町程ではないが頻繁にスコットランド人の侵寇を受けた。それ故にここから東へ英国版万里の長城が築かれたのは120年(完成は127年頃)¹⁷⁾であった。ルグヴァルムの名はサクソン時代にも引継がれていた。その後ブリトン人によって *Cear-Luel* と名づけられた。これらの名の起りは *Luguvallum* の方は *Lugus* という「神の城壁」の意といわれるが実は *Lugus* というのは *Luguvalos* という個人名で、これは *Lugus* のように強いという意の古い英語から出たとされる。一方 *Cear* は city の意であり、*Luel* は *Lugus* の語が9世紀にこう変ったのであった。

われわれ日本人、特に北海道の人間には少しも珍しくない風景をひろげる有名な湖水地方 *Lake Country of District* はこの町から南にすぐ下った一帯である。

31 Barkloughly

III. II. 1

附図1-4B

リチャード二世がアイルランド遠征から帰国した上陸地点をホリンシェドは *Barclowlie* と記録していて、シェイクスピアはこれに拠ったものであるが、他の年代記ではその地点をミルフォード *Milford* (附図1-5A) あるいはペンブローック *Pembroke* (附図1-5B) としている。*Barclowlie* (*Barkloughly*) は多分今日のハーレック *Harlech* であると推測されている。ここはその城で有名で、城はエドワード一世がウェイルズ統合のためにウェイルズに多くの城—*Aberystwyth*, *Beaumaris*, *Builth Wells*, *Caenarvon*, *Conway*, *Criccieth*, *Denbigh*, *Flint*, *Harlech*, *Rhuddlan* (これらの地はすべて附図1にある) を築いたが、その中でブーマリス城、カーナボン城、コーンウェイ城、フリント城、ハーレック城、ルドラン城はエドワード一世の六城として特に有名である。ハーレック城はかつてケルト人の築いた要塞の

あった場所に、王の命によって当時すぐれた築城技術家であったジェイムズ James of St George が 1283 年頃建設に着手し、凡その完成は 1290 年であった。二重の城壁に囲まれた殆んど方形に近い形であって典型的なエドワード王式の築城形態を示しているが、東側と南側に広い濠がめぐらされ、北と西は切り立った崖となって海に通じており、60 m を越える崖の上に円い隅塔とそれを結ぶ城壁とが烈しい緊張感を漂わせて四囲を制圧するばかりに厳しく築かれている為 'bold rock' の名がついており、城郭都市を形成するカーナボン城等と違って、戦闘用の為に一個の全く独立した城塞であり、その雄姿は数 km 先からも望むことが出来る。

バラ戦争で 1468 年この城に赤バラのランカスター軍が 1 年間も立て籠り、ペンブロック伯ハーバート卿 Lord Herebrt, Earl of Pembroke とその弟 Sir Richard Herbert の率いる白バラのヨーク軍を悩ました。城に籠もるウェイルズの忠節な猛将ダフィッド・アブ・アイニオン Dafydd ap Ieuan (Dafydd ab Einion) の守りは固かった。この時にダフィッドが作曲したといわれる「ハーレックの男たちの行進」The March of the Men of Harlech という曲は籠城軍の士気を高めたといわれる。この曲は今日広くイギリス人に親しまれている。降服勧告に答えたダフィッドの昂然たる答は今日迄伝えられている有名なものである。—"I had once hold a castle in France so long against siege that all the old women in Wales talked of it, and now I will hold a castle in Wales until the old women of France talked of it !" 城門での戦死者は 6,000 人であった。籠城軍の勇敢さに感動したハーバート卿はエドワード四世にダフィッド以下籠城軍の助命を約束させたという。

ロンドンのユーストン駅から約 307 km, 美しい中世の町チェスターからは 192 km である。入江が深いディ川 Dee の西河口にある人口 14,660 (1971) の町。エドワード一世が建てたウェイルズの一連の城（前項参看）のうち最も

早く建てられたものの一つで、王は 1277 年の夏から僅か 3 年間の突貫工事でこの城を築いた。城の基礎工事等に最初の一週間で 10 万ポンドと 950 人の人足を費したといわれる。こういう手早い強引な実行力がエドワード王の持ち味でもあった。城は北と東がティ川に面し、天主閣は城壁の外にあって天主閣の周りの殆んどは濠となっていて、この形態はエドワード王の築城としては唯一の例外的構築である。城は今日甚だしく廃れ、崩れた城壁に連なる崩れかけた隅塔が一つと、城壁の外側に天主閣が残るだけである。1399 年 8 月リチャード二世はボーリングブルックの奸計にかゝってこの城で捕えられ（「ブリタニカ百科事典」はコーンウェイ城としている）、9 月 29 日（または 30 日）に王位を剝奪された（34 項参看）。そして 10 月 28 日リチャードはヨークシャーのポンティフラクト城（39 項参看）に送られてそこで 1400 年 2 月 14 日餓死したといわれる。

33 Langley

Ⅲ. Ⅳ. ト書

附図 1-5 F

今日の King's Langley のこと。ハートフォードシャーの南西部にあってセント・アルバンズの南西である。エドワード三世の第五子初代ヨーク公エドマンドは 1341 年 6 月 5 日この地に生れたので Edmund de Langley と呼ばれた。彼は 1394 年から 1399 年の間リチャード二世の三度にわたる外征の間に摂政を務めた。この町にある教会 King's Langley church にはヨーク公とその妃イサベラ Isabella of Castile の像がある。

34 Westminster Hall

Ⅳ. Ⅰ. ト書

附図 3-3 B

地名ではないが建物の所在場所としてこゝに説明する。図のようにテムズ川西河畔に建つ国会議事堂の建物の下院の一部で西に突き出た部分がウエストミンスター・ホールである。征服王の子の第二代ウィリアム・ルーフスが 1097 年に創建し、1099 年に完成したもので昔はウエストミンスター宮殿の一

部であった。こゝは 13 世紀から 1882 年¹⁸⁾まで王政庁から派生したコモン・ロー裁判所の一つで、他に王座裁判所と財務裁判所があった。1327 年エドワード二世が捕えられ廃位を宣せられたのがこゝであった。リチャード二世は 1393 年の夏このホールを美しく改築した。特にオークで作った屋根は当時のヨーロッパ随一の華麗なものであった。王はこのオークを征服王がハロルドとの戦いで勝利を収めたバトル (SHE-1, p. 105) の近くのペトリィ Petley にある御料林 King's Wood¹⁹⁾から集めた。このようにこの建物を改築したりチャード二世の運命はまことに皮肉なもので、王は 1399 年こゝで廃位させられたのである。このホールにかゝわる運命の皮肉はまだある。1649 年 1 月、時の国王チャールズ一世はこゝで裁判にかけられ死刑となった。王は 1649 年 1 月 30 日午前 10 時幽閉されていたセント・ジェームズ宮殿からまだ霜の消えぬセント・ジェームズ公園を通り抜けてホワイト・ホール (SHE-1, p. 101) に向った。沿道には群衆が溢れていた。王はホワイト・ホールに一旦入り、その後外に設けられた処刑台に引き出されて首を切られた。午後 2 時 4 分であった。見物人はホワイト・ホールの屋根にまで鈴なりとなった。王の首を切った側の主領、つまり議会派の領袖クロムウェルが 1653 年護民卿 Lord Protector に就いたのも、また王政復古後彼の首が改めて晒されたのもこのウエストミンスター・ホールであった。そうして今日、右手に剣を、左手にバイブルを持った彼の像が建っているのもまたこの建物の前である。

ウエストミンスター・ホールは 1834 年の火災からも免がれ、また第二次世界大戦中の 1941 年の爆撃による破壊も修復されてわれわれはかつての原型に近い姿を見ることが出来る。

35 Surrey

IV. I. ト書

SHE-1

36 Venice

IV. I. 97

附図 2-2 D

慣用的に使われるベニスの名は英語ヴェニス Venice であってイタリア語ではヴェネツィア Venezia である。イタリア北東部、アドリア海北端、ヴェネツィア湾の西部の浅瀬の洲、すなわち潟^{ラグーナ} Laguna の上に建設された町であるのでヴェネツィアは一名 La città della laguna ともいわれる。人口約 36.7 万 (1969)。町は陸地から 4 km、外海から 2 km 離れ、118 の小島を 177 本の運河と 400 以上の橋とで結んだ水の都で世界的な観光地である。昔は陸地から孤立していたが現在は 1933 年に建設された鉄道橋とこれに並行する道路橋とによって本土と結ばれている。運河のうちで最も有名で最大のものがその名の通りのカナル・グランデ Canale Grande で、長さ 3.8 km、幅 30~70 m、深さ 5 m~5.5 m のこの逆 S 字形の大運河によって町は東北と西南の 2 地区に分かれている。建物は坑の上に基礎を置き、出入口は内側道路にも通じてはいるが、正面は運河に面し、玄関前の階段が船付場となる。潮の干満の差は 60 cm もあって石段は勿論建物の基礎部分も苔に蔽れている。記念建築物ともなっている古い 200 の大邸宅・宮殿の殆んどはカナル・グランデに面している。運河には水上バス Vaporette、モーターボート Motoscafo それに gondola Gondola が走るだけでこの町には自動車も走らないことが大きな特色である。

西暦 452 年以前この地方はローマ帝国の中でも最も栄えた町であったが蛮族の侵入で住民は今日のヴェネツィアに移ってこの町を繁栄させ、810 年中世ヨーロッパの最も強力な都市となり「アドリア海の女王」の名を恣にした。1797 年にナポレオンがこの町をオーストリアの支配下に置いた時点でその独立を失い、その後 1866 年にイタリア王国に統合された。12 世紀から 18 世紀にかけての建築様式が数多く見られ、絵画、橋にも貴重なものが多い。またヴェネツィア・ガラスの名で知られるガラスは装飾芸術であり、その他七宝、レース、陶器、木工品などの生産も盛んである。

38 Troy V. I. 11

SJC

39 Pomfret V. I. 52

附図 1-3 E

Pontefract のこと。ヨークシャーのリーズ Leeds の約 20 km 南にある人口 31,335 (1971) の町。ロンドンからは鉄道で 293 km。この地名は「壊れた橋」に由来するもので、1177 年には Pontfreit の形であった。今日の古い地方的発音 [ˈpʌmfrit] は Pumfrete (1185 年頃—1193 年) と Puntfreit (1226 年) の古い綴りに対応するものである。音〔の最近の地方的発音の [ˈpʌmfɹət] または [ˈpʊmfɹət] は Pounfre(i)t とシェイクスピアも使っている Pomfret に対応するものである。尚「壊れた橋」として世に有名なものはローマのテヴェレ川に残っている Ponte Rotto である (SJC, p. 370 f.)。ここにあるノルマン式の城は 11 世紀後半にイルバート Ilbert de Lacy という人によって建てられたため Ilbert Castle の名でドゥームズデイ・ブックに記録されていた。ジョン・オブ・ゴント及びその子ヘンリー四世の居城となり、17 世紀にはイングランドにおける最も強力な城の一つであったと伝えられるが今は廃址である。

本劇の第 5 幕でリチャード王はエクストンの士爵ピヤースに殺されているが、これはシェイクスピアの創作であって、32 項に述べたように餓死したというのが最も史実に近い。

40 Rutland V. II. 44

附図 1-4 F

イングランド 40 州の中で最小の州で面積 394 km²、人口約 2.7 万 (1971)。州都オーカム Oakham の人口は僅か約 7,000 人である。

住民の殆んどは農耕従事である。昔から狐狩りで有名なところである。州の最南端のストック・ドライ Stoke Dry は火薬陰謀大事件に連座したディグビー卿の生地である (SMB, p. 333)。

41 Oxford V. II. 52 SHE-2

42 Cicester V. VI. 3 附図1-5E

今日は Cirencester と記してサイ(ア)レンセスターと発音するが、今日でも Cirencester をシセスターと発音する人がいるが、これはシェイクスピア時代の Cicester に対する発音の名残りである。当時はまた Ciceter と綴られた。ローマ領有時代はコリニウム・ドオブウノールム *Corinium Dobunorum* と呼ばれ、リンカンからエクセターに至るフォス・ウェイという主要なローマン・ロードと他の道路とが交叉する重要な地点であって、当時ブリタンニアにおけるローマ植民都市の中で二番目に大きい町であったが、ローマ軍の撤退後は忽ちのうちに廃れた。グロスターの南東約 23 km に位置する人口 13,022 (1971) の町でロンドンから鉄道で 155 km である。

43 Kent V. VI. 8 附図1-5G

ヨーロッパ大陸に最も近い位置にあることと気候がよく地味豊かなためにイングランドで最も早く開けた地方(本地誌考8項及びSHE-2の32項と43項参看)。紀元前55年と同54年ジュリアス・シーザーがブリタンニアに遠征した時上陸したのがこのケントの海岸であったし、第四代ローマ皇帝クラウディウスが遠征でブリタンニアに上陸した時にもその地点はケントの海岸であった²⁰⁾。またローマ領有時代が終る時蛮族に悩まされたブリトン王が救いを求め、それに応じて大陸から渡来してきたアングロ・サクソンの部族が上陸したのもこのケントのサネット島であった(SHE-1の28項)。またキリスト教がこの国に入ったのもこの地からであった。このためカンタベリにある大聖堂がこの国最大の総本山となっている(SHE-1の28項)。

このようにこの地誌考シリーズの中で既に何回となく触れてきたところである。

44 Bordeaux V. IV. 33

SHE-1

45 Holy Land V. VI. 49

パレスチナ Palestine〔英〕のこと。聖書の主要な背景をなす地方で、古くはカナンと呼ばれた。元々「低地・平地」の意で、ヨルダン川西部の全地域を指した。今日では東はヨルダン溪谷地帯、西は地中海に面し、北はレバノン山脈を境としてシリアに接し、南はユダヤ高地の尽きる所から砂漠となってシナイ半島の荒野に至り、アラビアやエジプトに連なる地方をその範囲としている。聖地エルサレムがあり、またこの地方が「アブラハムとその子孫に与えられた約束の地」であり、出エジプトもこの約束の地カナンを目指すものであり、「イスラエルの地」、「ヘブル人の地」、「主が約束した地」、「良く広い地」、「主が顧みられる所」、「全地の中で最も素晴らしい所」、「乳と蜜の流れる所」、「聖地」であるため常に宗教上の争地となり、十字軍の戦場となり、今日イスラエル共和国とヨルダン王国とに二分されているが、絶えず国際的紛争の地に今もって変わらない。

主イエスの誕生の頃はローマ帝国が領有するところでローマの総督の支配下にあって、イエス・キリストを十字架にかけたポンテオ・ピラト Pontios Pilatos (〔英〕 Pilate) はその第五代総督であった。

本劇この場でボーリングブルックが述べているように彼はリチャード二世を殺した罪の償いにパレスチナに行くことを考えていた。尚ボーリングブルックは既に 1392 年から 1393 年にかけてパレスチナに順礼しており、また彼は 1413 年 3 月 20 日にウエストミンスター大寺院の「イエルサレムの間」で亡くなっている。

尚 SMB の 2 項を参看されたい。

(昭和 52 年 5 月 20 日受理)

〔注〕

- 1) 筆者が既にかいた「地誌考」を参考されたい旨の場合には次のように略記した。

『ヘンリー八世』地誌考（前篇）…SHE-1

『ヘンリー八世』地誌考（後篇）…SHE-2

『マクベス』地誌考…SMB

『ジュリアス・シーザー』地誌考…SJC

2) 第三子とされることもある。それは第二子の William が夭折しているがためである。人名録には屢々このような違いのあるのはそのためである。

3) Walter Tyler ともいう。生年・出生及び生涯の殆んどが不明。彼の生涯の最後の9日間だけが歴史に残っている。1381年の農民一揆の指導者。エセックス州のコルチェスター Colchester（附図1-5 G）で生れてそこで煉瓦工（tiler）であつたらしい。労働者条例・人头税・その他の経済的不満に抗議して1381年6月10日（月）結集した反乱農民はケント州で蜂起し、メイドストーン Maidstone（附図1-5 G）でその指導者選ばれた彼は一揆を率いてカンタベリ、ロチェスターを経てロンドンを襲い、リチャード二世に謁して農奴制の廃止・商業の自由の制限の除去・反徒に対する恩赦の要求を約束させた（6月14日）。その後カンタベリの大司教サドベリ Simon Sudbury を反逆者としてロンドン塔で処刑した。ジョン・オブ・ゴートンも反逆者の一人としてリストにあがっていたが、偶々スコットランドに行っていて難を免れた。翌日タイラーは再び王と会見し、新たな要求を承認させようとしたが王たちの謀略にかゝり、彼はロンドン市長のウォールワース William Walworth に斬られた。1381年6月15日の夕闇の中であつた。

彼は志操堅固・頭脳明晰で極めて公明正大な常識の持ち主であつた。彼はジョン・オブ・ゴートンのサボイの豪館を焼打ちするに当ても自分たちが単なる暴徒・掠奪者でないことを徹底させ、ゴートンの家族を予め立ち退かせた程であつた。

4) この館は元来は1240年、ヘンリー三世の王妃の叔父であつて小シャルマーニュ Little Charlemagne と呼ばれたサヴォア公ピエール Peter, Earl of Savoy (1203-1268. 5. 15) がヘンリー三世に招かれて英国に来て滞在中に建造されたものでそれは1245年頃とされる。チョーサーはここで結婚式を挙げたと信ぜられている。一揆によって焼かれたがその後ヘンリー七世によって1505年病院として再建された。その後礼拝堂がこゝに建えられたが1864年焼失した。しかしヴィクトリア女王はそれを再建しそれが現存している（附図3-2 C）。

5) 竹内豊、『BOUDICCA—真実と詩』（室工大研究報告文科篇 8-3）p. 112

6) 当時英国の漁民はカレー市の漁民によって常に大きな打撃を受けていたためである。

7) 実は当時懐妊していた王妃の願いをきき入れたのであつた。

8) 一般にブロンズ彫刻は原型が残る限り複数の作品を作ることが出来る。しかも一

且鑄造されたブロンズからではなく、石膏等の原型から鑄造されたものはこれ皆すべて本物と称する。国立西洋美術館のものは松方コレクションが日本に返還されるに当ってロダン美術館の原型から特に新たに鑄造されたものであるのでコピーではない。小学館の『日本百科大事典』に複製と説明されているがこれは説明不足である。

9) ロンドンの有名なコヴェント・ガーデン Covent Garden (附図3-2C)の名は「修道院の庭」convent garden のつまって出来た名である(筆者『BOUDICCA』p. 345 参看)。

10) Woodstock の名は 1000 年頃 アングロ・サクソン 法典 Anglo-Saxon Laws に Wudustoc と、1123 年には『アングロ・サクソン年代記』に Wudestoke と記録されていた。1150 年頃ダーラムのシメオン Symeon of Durham が残した *Historia ecclesiae Dunelmensis* と *Historia regum* に 'Wdestoc, quod Latine dicitur silvarum locus' と記録されている。これはこの地がラテン語で森のある場所と呼ばれたことを示したものである。

尚この地名は奇しくも木で罪人の足をはさむ為に出来た「足かせ」の意ともなり、この足かせが原形のまゝ、この町の教会にある。

11) この場合われわれは名将の言葉に「人格上すぐれた」などの倫理上の意味を不用意に含ませてはならない。マールバラ公は金・名誉・権力を得る為には全く手段を選ばず、しかもそれを本人は全く疚しいものではないと思っている権数謀略の人であった。

12) 680-755. デボンシャーのカートン Kirton 又は Crediton に生れ、元の名は Winfrid 又は Winfrith であった。Boniface の名は彼の司祭としての精進献身に対して教皇グレゴリオ二世によって与えられたと伝えられる。716 年二人の徒僧を従えて大陸に渡り主としてドイツで伝道し 'Apostle of Germany' といわれた。754 年 Friesland (今日のオランダの北部) に福音伝道の為に赴いたが 755 年 6 月 5 日 Dokkum で異教徒に襲われて殺された。

13) ラテン名 Lefricus。コーンウォールに生れたといわれる。ローサンリンジア Lotharingia (今日のフランス北東部ロレーヌ Lorraine 地方) で教育を受けた。この教育が終生彼に強い影響を与え、大陸のキリスト教会の理想と改革の理想を植えた。エドワード証信王付の懺悔僧となった。彼はクレディトンのような海賊の襲撃を受け易い場所に司教座のあることに不満で城塞されているエクセターに移したい旨を書面にして彼の部下の Lanbert をローマの教皇レオ九世に使いさせた。教皇は証信王にそれを認めるように指示し、従順な証信王は自ら王妃と共に 1050 年エクセターに向向いてレオフリックに会ってそれを許した。レオフリックは多くの聖衣や礼拝用品それに 60 巻に近い書籍を教会に残した。蔵書の中の 28 巻は英語で書かれたもので、その中の一つに *Liber Exoniensis* として知られる詩文書は有名でこれが British Library にコピーされ、1842 年 *Codex Exoniensis* として出版され、更に 1933 年別のものも附加された複製本が出版された。

14) ベネディクト修道士としてフランスで修業。961 年から 992 年までウスター司教。また 972 年から 992 年までヨークの司教も兼ねた。992 年 2 月 29 日没。

15) または Wolstan。1012 年頃ウォリック近くのロング・イッチントン Long Itchington に生れる。ピーターバラ等で教育を受けた。彼は教えを乞う者は何人も厭わず、特に貧者の子の洗礼に自身出向きしかも無料を常とした。僧院にいない僧は金を貰わずにも洗礼をするのが任だというのが彼の主張であった。1062 年ウスター司教となった。ノーマン・コンクエスト以後征服王に仕えた。没年は 1095 年で死後直ちに聖人に列せられた。

16) SHE-2 の 172 頁参看。

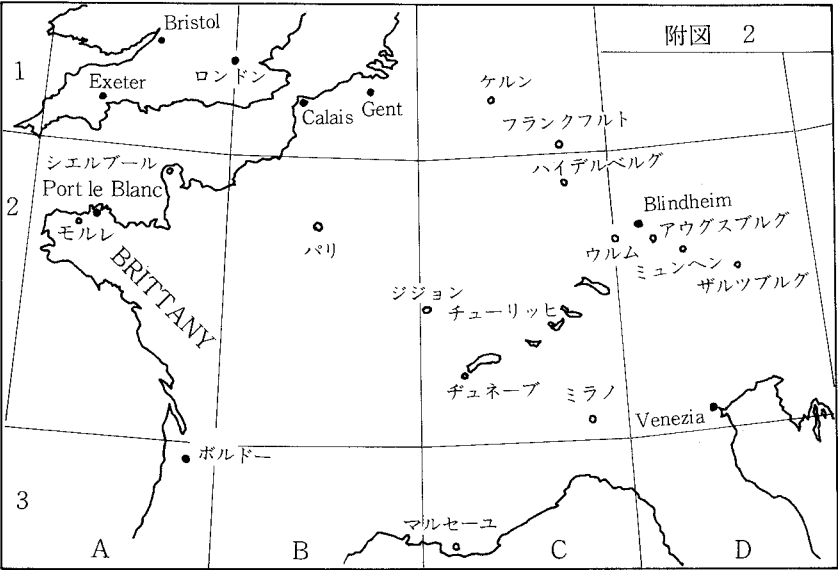
17) SHE-2 の 175 頁-176 頁参看。

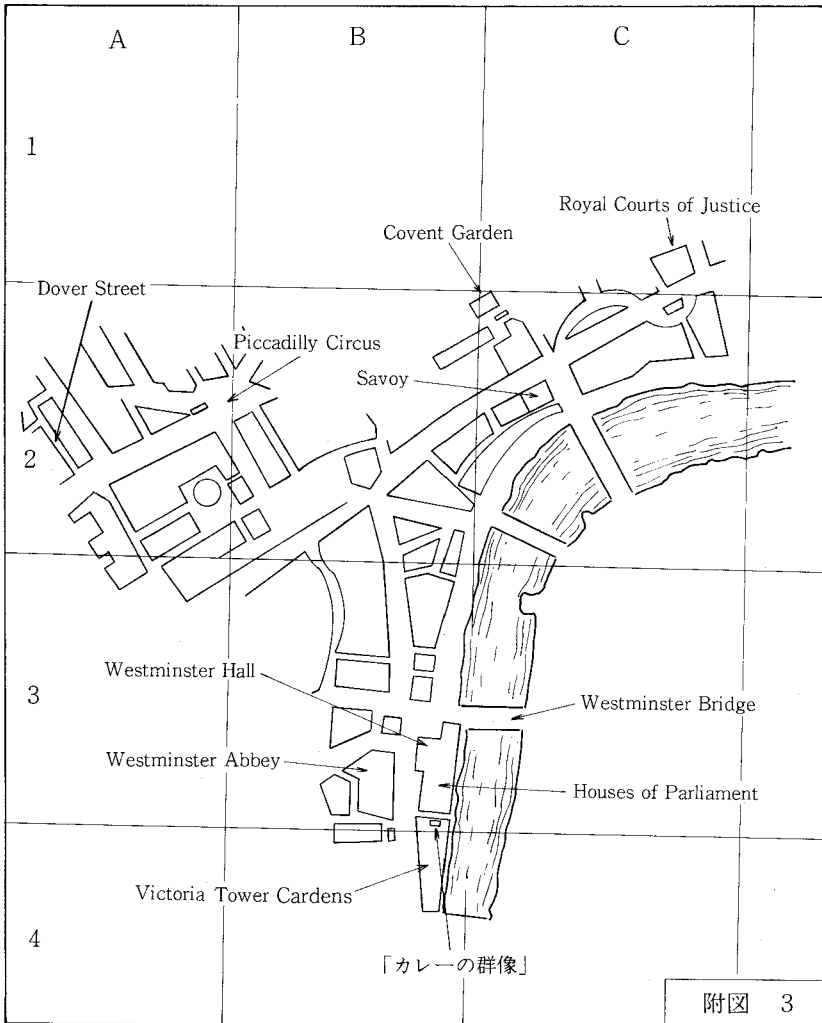
18) ロンドンのストランド街に 1874 年にロウ・コート Law Courts (正式名 Royal Courts of Justice. 附図 3-1C) の建築が始められそれが 1882 年に完成したからである。白亜に緑の屋根の美しいゴシック建築のこの建物はこの場所に変わりなく現存している。

19) ペトリイもキングス・ウッドも探し当らない。ただこの辺りには Oak の名のつく地名が非常に多いところからこの一帯はオークが大量に生産をされたものと考えられる。

20) 筆者の『BOUDICCA-真実と詩』(室工大研究報告文科篇 8-3) の 293 頁及び 318 頁を参看されたい。







附図 3

